

# 諏訪湖におけるオウチュウ *Dicrurus macrocercus* の長野県初記録

井川 洋<sup>1</sup>・笠原里恵<sup>2,3</sup>・堀田昌伸<sup>4</sup>

2020年5月23日に長野県中南部に位置する諏訪湖湖畔でオウチュウが観察された。これは長野県内におけるオウチュウの初めての記録である。オウチュウは全国的に記録があり、多くは渡りの時期に観察されていることから、今回諏訪湖湖畔で観察されたオウチュウも渡り途中の個体であると考えられた。

**キーワード：**オウチュウ, *Dicrurus macrocercus*, 諏訪湖, 長野県

## 1 はじめに

日本を利用する渡り鳥の多くが減少傾向にある<sup>1)</sup>~<sup>3)</sup>。その一方で、日本で観察される機会が増加している種もある。本報告では、日本各地で観察記録はあるものの<sup>4), 5)</sup>、長野県では記録がなかったオウチュウ *Dicrurus macrocercus* を2020年5月に県内中南部に位置する諏訪湖湖畔で観察したので報告する。

オウチュウ科 Dicruridae の種は現在世界に29種が知られており、アフリカとその周辺、また南アジアから東アジア、東南アジアまで分布している<sup>6)</sup>。このうち、オウチュウはイラン東部からインド、インドシナ、中国東部から北東部、スリランカ、ジャ

ワ、バリ、台湾などで繁殖する<sup>4)</sup>。北部に分布する個体群は越冬のために南下する<sup>7)</sup>。

## 2 観察記録

個体が長野県内で観察されたのは、2020年5月23日の午前6時8分、諏訪湖南部（長野県諏訪市、 $36^{\circ} 02'20.7''N 138^{\circ} 05'34.6''E$ 、図1）湖畔のヨシ原とヤナギ科 Salicaceae の高木および低木が混在する環境であった。個体は、湖岸線から21mのヨシ原と道路の境界付近に植えられたヤナギ科ヤナギ亜属 *Salix* シダレヤナギ節 Subalbae の高さ約15-17mの樹木の樹冠部を15分程度短距離飛翔しながら、

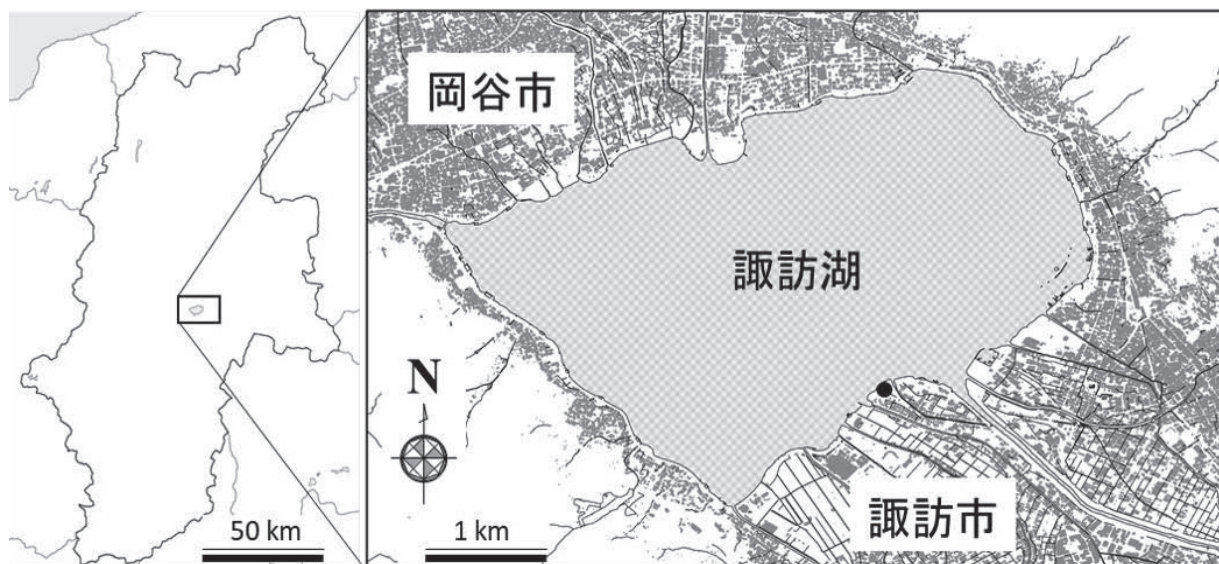


図1 オウチュウが観察された場所（黒丸）

- 1 信州大学理学部 〒390-8621 松本市旭 3-1-1
- 2 信州大学理学部附属諏訪臨湖実験所 〒392-0027 諏訪市湖岸通り 5-2-4
- 3 信州大学山岳科学研究拠点 〒392-0027 諏訪市湖岸通り 5-2-4
- 4 長野県環境保全研究所自然環境部 〒380-8570 長野市北郷 2054-120



写真1 諏訪湖湖畔のヤナギ類の高木で観察されたオウチュウ *Dicrurus macrocercus*

断続的にギーもしくはジージェというやや濁った金属質な声で鳴き、その後、畑地や住宅地が点在する南東の方向へと飛び去った。5日後の5月28日には観察されず、それ以降も観察されなかった。発見時は、個体から約10m離れた場所から12倍の双眼鏡を用いて観察し、撮影はデジタルズーム10倍のデジタルカメラを用いた。

観察された個体(写真1)の全身は背面も腹面も黒色で、背面には光沢が見られた。尾羽は中央尾羽が最も短く外側へいくほど長くなる、深い凹尾型であった。大きさはヒヨドリ *Hypsipetes amaurotis* 程度であったが、ヒヨドリは角尾であり、全身も灰青色味や茶色味があるため容易に区別できる。個体のくちばしは黒く、直線的であった。頭部に冠羽などは認められず、目の虹彩は遠目ではっきりとはわからなかった。全身の色、大きさ、また特徴的な尾羽の形状から、観察された個体はオウチュウ科オウチュウ属 *Dicrurus* の種であると考えられた。

これまで日本におけるオウチュウ科オウチュウ属の種の記録は、オウチュウやハイイロオウチュウ *D. leucophaeus*、カンムリオウチュウ *D. hottentottus* がある<sup>4), 5)</sup>。ハイイロオウチュウはアフガニスタン東部からヒマラヤやインドシナ、マレー半島などの

東南アジア、中国東部や北部まで広く分布し、北部の個体群は冬季に南西部へ移動して越冬する<sup>4)</sup>。カンムリオウチュウもインドからインドシナ、中国中央部から南部まで広く分布し、分布域の北部の個体群が渡りをする<sup>4)</sup>。諏訪湖湖畔で観察された個体では、オウチュウ特有の口角に見られる白斑が光の加減などから明確には確認できなかったため、日本で過去に記録のある3種の形態や鳴き声についての既存の情報と比較して種の同定を行った。ハイイロオウチュウには黒色系の亜種と灰色系の亜種の両方がおり、黒色系の亜種はオウチュウに似る<sup>8)</sup>。黒色系のハイイロオウチュウの尾羽の凹型部は相対的にオウチュウより深いとされるが、諏訪湖湖畔で観察された個体では尾羽の凹型部の深さは明確ではなかった。ただし、ハイイロオウチュウの鳴き声は濁らず連続的であり、観察された個体の鳴き声とは特徴が一致しなかった。そのため、観察された個体はハイイロオウチュウではないと判断した。また、観察された個体ではカンムリオウチュウの特徴である髪の毛のような細長い飾り羽が額から頭の後ろまで伸びているか否かは確認できなかったが、カンムリオウチュウの尾羽の外側の羽は背面方向に反り返っていることや嘴がやや下向きに曲がっていること<sup>9)</sup>を鑑みると、観察された個体はカンムリオウチュウではないと判断された。岩田・小田谷<sup>10)</sup>は、千葉県で確認されたオウチュウの検討に際して、姿の特徴が似ており熊本でさえずりの確認記録があるオウチュウカッコウ *Surniculus lugubris*<sup>11)</sup>や日本に記録がまだないが南アジアや東南アジア、台湾などに分布するヒメオウチュウ *D. aeneus*<sup>12)</sup>とも比較を行っている。諏訪湖湖畔で観察された個体の尾羽の下面にはオウチュウカッコウのような白斑もしくは白線は見られず、ピピピピなどと連続的に鳴くオウチュウカッコウとは鳴き声も異なっており、また、ヒメオウチュウに特徴的な背面の青緑色もしくは紫色の強い金属光沢は今回観察された個体にはみられなかった。以上から、諏訪湖湖畔で観察された個体はオウチュウと判断された。本種の幼鳥や当年生まれの若鳥は、羽色に茶色味やくすみがあり、下尾筒や胸から腹にかけての羽毛の端が白いなどの特徴がある<sup>7)</sup>。しかし、今回観察された個体にはそれらの特徴は認められず、成鳥であると考えられた。一方で、オウチュウは雌雄がほぼ同色であることから、今回の個体の性は識別できなかった。オウチュウは

もともと疎らな樹林を含む郊外の開放地や畑地に生息し<sup>7)</sup>、青森県でも開けた農耕地で記録されている<sup>13)</sup>。今回個体が記録された疎らなヤナギの高木を含む諏訪湖湖岸のヨシ原はこれらの環境と類似していた。

我が国におけるオウチュウは1976年4月に西表島ではじめて記録され、1980年代以降は各地での観察が増加した<sup>5)</sup>。現在では、北海道の利尻島から本州の青森県、千葉県、石川県、岐阜県、愛知県、静岡県、九州地方まで広く観察されている<sup>4), 5)</sup>。これらの観察の多くは4-5月の渡りの時期だが<sup>5)</sup>、関東では12月にも記録されている<sup>10)</sup>。このように全国的に観察数が増加し<sup>5)</sup>、長野県周辺の県ですでに観察記録のある<sup>4)</sup>オウチュウが、長野県で観察されたことは不思議なことではない。本州でも内陸部に位置する長野県では、堀田ら<sup>14)</sup>のように、台風などに伴って稀な種が観察されることがあるが、本個体が観察された5月23日の直前10日間には台風や全国的な強風など特異的な気象状況は確認できなかったため、全国での観察事例の多くと一致して、渡り途中の個体が観察されたと考えられる。なお、調べた限りではオウチュウの飼育記録は報告されておらず、今回観察された個体が飼育個体の逸脱である可能性は低いと考えられる。

### 3 まとめ

一般的に鳥類は、気候変動や土地利用の変化などの様々な要因によって種の分布範囲に影響を受けうるが<sup>2), 15)</sup>、全国的にオウチュウやハイイロオウチュウの観察記録が増加もしくはその地域が拡大している背景は不明である。今後もこのような観察事例の報告を埋没させることなく記録として残していくことで、長い時間軸での県内および国内の鳥類相の変化を把握し県版レッドリストの改定などの際に役立つ資料となる。

### 謝 辞

本報告を取りまとめるにあたって、植松永至氏には文献収集にご助力いただきました。また、長野県環境保全研究所の匿名の査読者の方々には有益なご助言を頂きました。上記の方々に深く感謝申し上げます。なお、この報告は、「信州の生物多様性の保全および

自然資源の価値共有手法の開発」(2017~2021年度)の一環で、鳥類目録作成のために情報収集されたものである。

### 文 献

- 1) Amano, T & Yamaura, Y (2007) Ecological and life-history traits related to range contractions among breeding birds in Japan. *Biological Conservation* 137: 271-282.
- 2) Yamaura, Y, Amano, T, Koizumi, T, Mitsuda, Y, Taki, H & Okabe, K (2009) Does land - use change affect biodiversity dynamics at a macroecological scale? A case study of birds over the past 20 years in Japan. *Animal Conservation* 12: 110-119.
- 3) Amano, T, Székely, T, Koyama, K, Amano, H & Sutherland, W, J (2010) A framework for monitoring the status of populations: an example from wader populations in the East Asian-Australasian flyway. *Biological Conservation*, 143: 2238-2247.
- 4) 日本鳥学会 (2012) 日本鳥類目録改訂第7版. 日本鳥学会, 三田.
- 5) 池長裕史・川上和人・柳澤紀夫 (2014) 日本鳥類目録改訂第7版で新たに掲載された種および亜種の記録等について. *日鳥学誌* 63: 96-149.
- 6) Winkler, D, W, Billerman, S, M & Lovette, I, J (2020) Drongos (Dicruridae), version 1.0. In *Birds of the World* (Billerman, S, M, Keeney, B, K, Rodewald, P, G, & Schulenberg, T, S, Editors). Cornell Lab of Ornithology, Ithaca, NY, USA.
- 7) Rocamora, G & Yeatman-Berthelot, D (2020) Black Drongo (*Dicrurus macrocercus*), version 1.0. In *Birds of the World* (del Hoyo, J, Elliott, A, Sargatal, J, Christie D, A, & de Juana, E, Editors). Cornell Lab of Ornithology, Ithaca, NY, USA.
- 8) Rocamora, G & Yeatman-Berthelot, D (2020) Ashy Drongo (*Dicrurus leucophaeus*), version 1.0. In *Birds of the World* (del Hoyo, J, Elliott, A, Sargatal, J, Christie D, A, & de Juana, E,

- Editors). Cornell Lab of Ornithology, Ithaca, NY, USA.
- 9) Rocamora, G, del Hoyo, J, Collar, N, Yeatman-Berthelot, D, Christie, D, A & Kirwan, G, M (2020) Hair-crested Drongo (*Dicrurus hottentottus*), version 1.0. In Birds of the World (Billerman, S, M, Keeney, B, K, Rodewald, P, G, & Schulenberg, T, S, Editors). Cornell Lab of Ornithology, Ithaca, NY, USA.
- 10) 岩田光二・小田谷嘉弥 (2017) 千葉県野田市・茨城県守谷市における越冬期のオウチュウ *Dicrurus macrocercus* の観察記録. 我孫子市鳥の博物館調査研究報告 23: 1-5.
- 11) 三田長久 (2010) 熊本県立田山におけるオウチュウカッコウのさえずりの記録. Bird Research 6: S13-S16.
- 12) Rocamora, G & Yeatman-Berthelot, D (2020). Bronzed Drongo (*Dicrurus aeneus*), version 1.0. In Birds of the World (del Hoyo, J, Elliott, A, Sargatal, J, Christie D, A, & de Juana, E, Editors). Cornell Lab of Ornithology, Ithaca, NY, USA.
- 13) 宮彰男・高橋雅雄(2012)青森県におけるオウチュウ *Dicrurus macrocercus* の初記録. Strix 28: 105-108.
- 14) 堀田昌伸・林正敏・笠原里恵 (2010) 2009 年台風 18 号 (台風メーロー) 通過後に長野県内で初記録されたシロアジサシ *Gygis alba*. 長野県環境保全研究所研究報告 6: 71-73.
- 15) Howard, C, Stephens, P, A, Tobias, J, A, Sheard, C, Butchart, S, H, & Willis, S, G (2018) Flight range, fuel load and the impact of climate change on the journeys of migrant birds. Proceedings of the Royal Society B: Biological Sciences, 285(1873), 20172329.

## First record of the Black Drongo (*Dicrurus macrocercus*) at the Lake Suwa in Nagano Prefecture, central Japan

You IKAWA<sup>1</sup>, Satoe KASAHARA<sup>2,3</sup> and Masanobu HOTTA<sup>4</sup>

1 Faculty of Science, Shinshu University, 3-1-1 Asahi, Matsumoto, Nagano 390-8621, Japan

2 Suwa Hydrobiological Station, Faculty of Science, Shinshu University, 5-2-4 Kogan-dori, Suwa, Nagano 392-0027, Japan

3 Institute of Mountain Science, Shinshu University, 5-2-4 Kogan-dori, Suwa, Nagano 392-0027, Japan

4 Natural Environment Division, Nagano Environmental Conservation Research Institute, 2054-120 Kitago, Nagano

Key words : Black Drongo, *Dicrurus macrocercus*, Lake Suwa, Nagano Prefecture